



1963-1969

近畿大会準優勝、涙の抽選負け



26期サッカー部と私

始めに、皆に引っぱられて何とか6年間をサッカー部で過ごし、卒業してからは、何ら親交もない落ちこぼれの私にどういう訳で、こういう大役が廻ってきたのか、又どうして安易に引き受けてしまったのか、今更ながらに後悔して居ります。引き受けた以上名文をと思いつつも普段からの筆無精がたたって文字を書くのが精いっぱいでも原稿と言えるしろものができるとは思われません。むしろ迷文になる可能性大であります。

漢字一つとっても国語辞典と漢和辞

典を片手にひっきりなしに索引している次第です。

思い余って妻に代筆を頼んだところ、一笑に付され机の前に座らされてしまいました。止むなく10日以上も前に買ってきた原稿用紙を開いて見たもののタバコをくわえたままペンが止まっている有り様です。

さて今日は、1993年11月3日文化の日の祝日ですが、数日前には、1994年のワールドカップの本予選最終日の様子がテレビでオンエアされていました。後で発表された事ですが、何と関東地方では60%、関西エリアでも50%という高視聴率だったそうです。

私もテレビの前にかじりついて日本

を応援していた一人ですが、結果は残念ながら日本のワールドカップ行きが断念されるという悲痛なものでした。心身共に燃焼しきった日本の選手達が声をあげて涙しているのを見て、思わず自分の目からも涙がしたり落ちているのを後になって気付いた私自身もそこに在りました。

次元は全く違いますが、そこには遠い昔、近畿大会の準決勝で抽選負けを喫し、声をあげて泣いた自分自身が相交錯して存在していました。

その頃は1993年がJリーグ元年と呼ばれ、プロサッカーチームの台頭とそのサッカー熱が若い少年達にも及び、今やサッカー少年が野球少年の3倍も



スポーツは何をするのか思いを遠くに馳せて日々を何とか過ごす幸せに恵まれているのが現状です。

そうそう忘れてはいけないのはヒルケルさんの存在でした。陰になり日なたになりサッカー部を応援して頂きました。葉巻をくゆらせながら巨体を小さなワーゲンビートルに押し込んで運転している姿がまぶたを閉じれば目の奥にありありと焼きついています。

私も哀悼の意を込めて「ヒルケル号」と名付けたワーゲンビートルのハンドルを握りながら、「シュート、シュート」と連呼するヒルケルさんの姿を何度となく思い出したものです。

いざ書き始めてみると、もう既に若くして他界した仲間や、あいう事もあったこんな事と色々な思い出が走馬灯の如くめぐり、唯支離滅裂な文章になっているのに途中でも気付いたのですが敢えて思いつくままにペンを進めました。

「おーい！ 皆元気か！ 俺は何とかやっているぞ。何時の日か酒でも酌み交わしながら、昔の思い出、今現在、未来の事を語り合おうぜ」

最後にこの五十年史の編集に携わっている方々に、「御苦労様。でもしっかり頼みます」の言葉を添えてペンをおかせて頂きます。 1993年11月3日

[赤堀 雄二]

存在するなんて思いもよらぬ事でした。

それでも我々26期のサッカー部は、例年になく部員数も集まり活気を呈して居りました。加えてサッカー部顧問の佃先生も気のせいとか我々26期のサッカー部にはより一層熱心であり、期待もされていたように感じて居ります。と同時に私にとって佃先生は六甲学院在学中は最も恐れていた存在でもありました。

先頃その佃先生、今は教頭先生だそうですが、会う機会を得て数十分の話をした中で先生の愛情の深さや人間味が、昔、試合中でもグラウンドに駆け入り檄を飛ばす情熱家と私は記憶して

いるのですが、と違って、否昔からそうだったのに気付かなかっただけかも知れないのですが、私の心を強く打って止むことを知りませんでした。

私自身はと言えば長い間「陰の世界」で何年かを過ごして来たのですが、一人ぼっちになり寝たきりになった特別介護の老人、父の面倒を見るために帰る時がやってきたのと同時に日の当たる世界に戻って来たのが10年程前の事でした。その父も5年程前に他界し、代わりに40才近くになって私自身父親となり現在に到って居ります。

守ってやらねばならない5才になったばかりの子供が将来どうなるのか、